

# 本所両国

芥川龍之介

青空文庫



## 「大溝」

僕は本所界隈のことをスケッチしろといふ社命を受け、同じ社の〇君と一しよに久振りに本所へ出かけて行つた。今その印象記を書くのに当り、本所兩國と題したのは或は意味を成してゐないかも知れない。しかしなぜか兩國は本所区のうちにあるものの、本所以外の土地の空気も漂つてゐることは確かである。そこで〇君とも相談の上、ちよつと電車の方向板じみた本所兩國といふ題を用ひることにした。――

僕は生れてから二十歳頃までずっと本所に住んでゐた者である。明治二三十年代の本所は今日のやうな工業地ではない。江戸二百年の文明に疲れた生活上の落伍者が比較的大勢住んでゐた町である。従つて何処を歩いてみても、日本橋や京橋のやうに大商店の並んだ往來などはなかつた。若しその中に少しでも賑やかな通りを求めるとすれば、それは僅に兩國から亀沢町に至る元町通りか、或は二の橋から亀沢町に至る二つ目通り位なものだつたであらう。勿論その外に石原通りや法恩寺橋通りにも低い瓦屋根の商店は軒を並べてゐたのに違ひない。しかし広い「お竹倉」をはじめ、

「伊達様」「津軽様」などといふ大名屋敷はまだ確かに本所の上へ封建時代の影を投げかけてゐた。……

殊に僕の住んでゐたのは「お竹倉」に近い小泉町である。「お竹倉」は僕の中学時代にもう両国停車場や陸軍被服廠ひふくしやうにやつてしまつた。しかし僕の小学時代にはまだ「大溝」に囲まれた、雑木林ざふきばやしや竹藪たけくさの多い封建時代の「お竹倉」だつた。「大溝」とはその名の示す通り、少くとも一間半あまりの溝どぶのことである。この溝は僕の知つてゐる頃にはもう黒い泥水をどろりと淀よどませてゐるばかりだつた。（僕はそこへ金魚ぼうぶにやる子を掬すくひに行つたことをきのふのやうに覚えてゐる。）しかし「御維新」以前には溝よりも堀ほりに近かつたのであらう。僕の叔父おぢは十何歳かの時に年にも似合はない大小を差し、この溝の前にしやがんだまま、長い釣竿つりざををのぼしてゐた。すると誰か叔父の刀にぴしりと鞘さや当てをしかけた者があつた。叔父は勿論むつとして肩越しに相手を振り返つてみた。僕の一家一族の内にもこの叔父程負けぬ氣の強かつた者はない。かういふ叔父はこの時にも相手によつては売られた喧嘩けんかを買ふ位の勇氣は持つてゐたのであらう。が、相手は誰かと思ふと、朱鞘しゆさやの大小を門くわんぬぎ差さしに差した身の丈拔群たけの侍さむらひだつた。しかも誰にも恐れられてゐた「新徴組」の一人ひとりに違ひなかつた。かれは叔父を尻目しりめにかけながら、にや

にや笑つて歩いてゐた。叔父は彼を一目みたぎり、二度と長い釣竿の先から目をあげずに見るとかいふことである。

僕は小学時代にも「大溝」の側を通る度にこの叔父の話を思ひ出した。叔父は「御維新」以前には新刀無念流の劍客だつた。(叔父が安房上総へ武者修行に出かけ、二刀流の劍客と仕合をした話も矢張り僕を喜ばせたものである。)それから「御維新」前後には彰義隊に加はる志を持つてゐた。最後に僕の知つてゐる頃には年とつた猫背の測量技師だつた。「大溝」は今日の本所にはない。叔父も亦大正の末年に食道癌を病んで死んでしまつた。本所の印象記の一節にかういふことを加へるのは或は私事に及び過ぎるであらう。しかし僕は〇君と一しよに両国橋を渡りながら、大川の向うに立ち並んだ無数のバラックを眺めた時には實際烈しい流転の相に驚かない訣には行かなかつた。僕の「大溝」を思ひ出したり、その又「大溝」に釣をしてゐた叔父を思ひ出したりすることも必しも偶然ではないのである。

## 両国

両国りやうこくの鉄橋は震災前しんさいいぜんと変らないといつても差支さしつかへない。唯鉄の欄干らんかんの一部はみすばらしい木造に變つてゐた。この鉄橋の出来たのはまだ僕の小学時代である。しかし櫛形くしがたの鉄橋には懐古の情も起つて来ない。僕は昔の両国橋に——狭い木造の両国橋に——まだに愛惜あいしやくを感じてゐる。それは僕の記憶によれば、今日こんにちよりも下流にかゝつてゐた。僕は時々この橋を渡り、浪なみの荒い「百本杭ひゃつほんくわ」や芦あしの茂つた中洲なかずを眺めたりした。中洲に茂つた芦は勿論、「百本杭」も今は残つてゐない。「百本杭」もその名の示す通り、河岸かしに近い水の中に何本も立つてゐた乱杭らんくわである。昔の芝居は殺し場ころばなどに多田ただの薬師やくしの石切場いしきりばと一しよに度々この人通りの少ない「百本杭」の河岸かしを使つてゐた。僕は夜は「百本杭」の河岸かしを歩いたかどうかは覚えてゐない。が、朝は何度もそこに群むらがる釣師つりしの連中を眺めに行つた。〇君は僕のかういふのを聞き、大川おほかはでも魚さかなの釣れたことに多少の驚嘆おどろを洩もらしてゐた。一度も釣竿つりざなを持つたことのない僕は「百本杭」で釣れた魚なまの何なんと何なんだつたかを知つてゐない。しかし或夏の夜明けにこの河岸かしへ出かけてみると、いつも多い釣師つりしの連中ひとりは一人もそこに來てゐなかつた。その代りに杭あひだの間には坊主頭ぼうずの土左衛門どざゑもんが一人俯うつむ向けに浪に揺ゆすられてゐた。……

両国橋りやうこくばしの袂たもとにある表忠碑ひょうちゅうひも昔に變らなかつた。表忠碑を書いたのは日露役にちろえきの陸軍

総司令官 大山巖 侯爵である。日露役の始まつたのは僕の中学へはひり立てだつた。明治二十五年に生れた僕は勿論日清役のことを覚えてゐない。しかし北清事変の時には大

平といふ広小路（両国）の絵草紙屋へ行き、石版刷の戦争の絵を時々一枚づつ買つ

たものである。それ等の絵には義和団の匪徒や英吉利兵などは斃れてゐても、日本兵は一

人も斃れてゐなかつた。僕はもうその時にも矢張り日本兵も一人位は死んでゐるのに違

ひないと思つたりした。しかし日露役の起つた時には徹頭徹尾露西亞位悪い国はないと信

じてゐた。僕のリアリズムは年と共に発達する訣には行かなかつたのであらう。もつとも

それは僕の知人なども出征してゐた為めもあるかも知れない。この知人は南山の戦に鉄

条網にかかつて戦死してしまつた。鉄条網といふ言葉は今日では誰も知らない者はな

い。けれども日露役の起つた時には全然在来の辞書にない、新しい言葉の一つだつたので

ある。僕は大きい表忠碑を眺め、今更のやうに二十年前の日本を考へずにはゐられなかつ

た。同時に又ちよつと表忠碑にも時代錯誤に近いものを感じない訣には行かなかつた。

この表忠碑の後には確か両国劇場といふ芝居小屋の出来る筈になつてゐた。現に

僕は震災前にも落成しない芝居小屋の煉瓦壁を見たことを覚えてゐる。けれども今は薄

汚ない亜鉛葺きのバラツクの外に何も芝居小屋らしいものは見えなかつた。もつとも僕

は両国の鉄橋に愛惜あいじやくを持つてゐないやうにこの煉瓦建れんぐわだての芝居小屋にも格別の愛惜を持つてゐない。両国橋の木造だつた頃には駒止め橋こまとぼしもこの辺に残つてゐた。のみならず井生村楼ふむらうろうや二州楼にしうろうといふ料理屋も両国橋の両側に並んでゐた。その外ほかに鮎屋すしやの与平よへい、鰻うなぎ屋やの須崎屋すさきや、牛肉の外ほかにも冬になると猪ししや猿さるを食はせる豊田屋とよたや、それから回向院えきかうゐんの表門よこちやうに近い横町よこまちやうにあつた「坊主軍鶏ぼうずしやも」——かう一々数へ立てて見ると、本所ほんじよでも名高い食物屋くひものやは大抵たいていこの界限かいわいに集つてゐたらしい。

## 「富士見の渡し」

僕等は両国橋りやうごくぼしの袂たもとを左へ切れ、大川おほかはに沿つて歩いて行つた。「百本杭ひやっほんぐ」のないことは前にも書いた通りである。しかし「伊達様だてさま」は残つてゐるかも知れない。僕はまだ幼稚園時代からこの「伊達様」の中にある和霊神社われいのお神楽かぐらを見に行つたものである。なんでも母などの話によれば、女中の背中におぶさつたまま、熱心にお神楽をみてゐるうちに「うんこ」をしてしまったこともあつたらしい。しかし何処どこを眺めても、亜鉛葺トタンぶきのバラツクの外ほかに「伊達様」らしい屋敷は見えなかつた。「伊達様」の庭には木犀もくせいが一本

秋ごとに花を盛つてゐたものである。僕はその薄うす甘あまい匂におひを子供心にも愛してゐた。あの木犀も震災の時に勿論灰になつてしまつたことであらう。

流る転てんの相あひの僕おびを脅おびすのは「伊達様」の見えなかつたことばかりではない。僕は確かこの近所にあつた「富士見の渡し」を思ひ出した。が、渡し場らしい小屋は何処どこにも見えない。僕は丁度ちやうど道みちばたに芋いもを洗いそつてゐた三十前後の男に渡し場の有あ無むをたづねて見ることにした。しかし彼は「富士見の渡し」といふ名前を知つてゐないのは勿論、渡し場のあつたことさへ知らないらしかつた。「富士見の渡し」はこの河岸かから「明治病院」の裏手に當る向う河岸がへ通かつてゐた。その又向う河岸は掘割りになり、そこに時々何処どこかの家うちの家鴨あひるなども泳いでゐたものである。僕は中学へはひつた後のちも或親戚を尋ねるために度々「富士見の渡し」を渡つて行つた。その親戚は三遊派さんゆうはの「五りん」とかいふもののお上かさんだつた。僕の家うちへ何かの拍子ひやうしに円朝ゑんてうの息子むすこの出しゆつ入ふしたりしたのもかういふ親戚のあつたためであらう。僕は又その家の近所に今村次郎といふ標札を見付け、この名高い速記者（種々の講談の）に敬意を感じたことを覚えてゐる。――

僕は講談といふものを寄席よせでは殆ど聞いたことはない。僕の知つてゐる講釈師は先代の邑井吉瓶むらあきつべいだけである。（もつとも典山てんざんとか伯山はくざんとか或は又伯龍はくりゆうとかいふ新時代

の芸術家を知らない訣わけではない。従つて僕は講談を知るために大抵たいてい今村次郎いまむらじらう氏の速記本に依つた。しかし落語らくごは家族達と一しよに相生町あひおひちやうの広瀬ひろせだの米沢町よねぎはちやう（日本橋区）の立花家たちばなやだのへ聞きに行つたものである。殊に度々たびたび行つたのは相生町の広瀬だつた。が、どういふ落語を聞いたかは生憎あいにくはつきりと覚えてゐない。唯吉田国五郎よしだくにごろうの人形芝居を見たことだけは未だいまにありありと覚えてゐる。しかも僕の見た人形芝居は大抵たいてい小幡小平次こはたこへいじとか累かさねとかいふ怪談物だつた。僕は近頃大阪へ行き、久振ひさしぶりに文楽ぶんらくを見物した。けれども今日こんにちの文楽は僕の昔見た人形芝居よりも軽業かるわざじみたけれんを使つてゐない。吉田国五郎の人形芝居は例へば清玄せいげんの庵室あんしつなどでも、血だらけな清玄の幽霊たいふは大夫たいふの見台けんたいが二つに割れると、その中から姿を現はしたものである。寄席よせの広瀬も焼けてしまつたであらう。今村次郎氏も明治病院の裏手に——僕は正直に白状すれば、今村次郎氏の現存してゐるかどうかも知らないものひとりの一人である。

そのうちに僕は震災前ぜんと——といふよりも寧ろ二十年ぜん前と少しも変らないものを発見した。それは両国駅の引込み線おきこみせんを抑おさへた、三尺に足りない草土手くさどてである。僕は實際この草土手に「国亡びて山河さんか在り」といふ詠嘆を感じずにはゐられなかつた。しかしこの小さい草土手にかういふ詠嘆を感じるのなさけはそれ自身僕には情なかつた。

## 「お竹倉」

僕の知人は震災の爲めに何人もこの界限かいわいに斃たふれてゐる。僕の妻の親戚などは男女九人の家族中、やつと命を全まうしたのは二十前後はたちの息子むすこだけだった。それも火の粉を防ぐ爲めに戸板をかざして立つてゐたのを旋風の爲めに捲まき上げられ、安田家やすだけの庭の池の側へ落ちてどうか息を吹き返したのである。それから又僕の家へ毎日のやうに遊びに来た「お条さん」という人などは命だけは助かつたものの、一時は発狂したのも同様だった。（「お条さん」は髪の毛の薄い爲めに何処どこへも片付かずにゐる人だった。しかし髪の毛を生はやす爲めに蝠かうもり蝠かうもりの血などを頭へ塗ぬつてゐた。）最後に僕の通かよつてゐた江東かうとう小学校の校長さんは両眼とも明めいを失つた上、前年にはたつた一人の息子を失ひ、震災の年には御夫婦とも焼け死んでしまつたと言ふことだった。僕も本所ほんじよに住んでゐたとすれば、恐らくは矢張はりこの界限かいわいに火事を避けてゐたことであらう。従つて又僕は勿論、僕の家族も彼等のやうに非業ひごふの最後を遂げてゐたかも知れない。僕は高い褐色の本所会館を眺めながら、こんなことを〇君と話し合つたりした。

「しかし 両国橋を渡つた人は大抵助かつてゐたのでせう？」

「両国橋を渡つた人はね。……それでも元町通りには高圧線の落ちたのに触れて死んだ人もあつたと言ふことですよ。」

「兎に角東京中でも被服廠程大勢焼け死んだところはなかつたのでせう。」

かういふ種々の悲劇のあつたのはいづれも昔の「お竹倉」の跡である。僕の知つてゐた頃の「お竹倉」は大体「御維新」前と変らなかつたものの、もう総武鉄道会社の敷地の中に加へられてゐた。僕はこの鉄道会社の社長の次男の友達だつたから、妄りに人を入れなかつた「お竹倉」の中へも遊びに行つた。そこは前にも言つたやうに雑木林や竹藪のある、町中には珍らしい野原だつた。のみならず古い橋のかかつた掘割りさへ大川に通じてゐた。僕は時々空気銃を肩にし、その竹藪や雑木林の中に半日を暮らしたものであつた。溝板の上に育つた僕に自然の美しさを教へたものは何よりも先に「お竹倉」だつたであらう。僕は中学を卒業する前に英訳の「獵人日記」を拾ひ読みにしながら、何度も「お竹倉」の中の景色を——「とりかぶと」の花の咲いた藪の陰や大きい昼の月のかかつた雑木林の梢を思ひ出したりした。「お竹倉」は勿論その頃には厳しい陸軍被服廠や両国駅に變つてゐた。けれども震災後の今日を思へば、——「卻つて并州を望めば是故郷」

と支那人の歌つたのも偶然ではない。

総武鉄道の工事の始まつたのはまだ僕の小学時代だつたであらう。その以前の「お竹倉」は夜は「本所の七不思議」を思ひ出さずにはゐられない程もの寂しかったのに違ひない。夜は？——いや、昼間さへ僕は「お竹倉」の中を歩きながら、「おいてき堀」や「片葉の芦」は何処かこのあたりにあるものと信じない訣には行かなかつた。現に夜学に通ふ途中、「お竹倉」の向うに莫迦囉しを聞き、てつきりあれば「狸囉し」に違ひないと思つたことを覚えてゐる。それはおそらくは小学時代の僕一人の恐怖ではなかつたのであらう。なんでも総武鉄道の工事中にそこへ通つてゐた線路工夫の一人は宵闇の中に幽霊を見、氣絶してしまつたとかいふことだつた。

## 「大川端」

本所会館は震災前の安田家の跡に建つたのであらう。安田家は確か花崗石を使つたルネサンス式の建築だつた。僕は椎の木などの茂つた中にこの建築の立つてゐたのに明治時代そのものを感じてゐる。が、セセツション式の本所会館は「牛乳デー」とかいふもの

の為に植込みのある玄関の前に大きいポスタアを掲げたり、宣伝用の自動車を並べたりしてゐた。僕の水泳を習ひに行つた「日本游泳協会」は丁度この河岸にあつたものである。僕はいつか何かの本に三代將軍家光は水泳を習ひに日本橋へ出かけたと言ふことを発見し、滑稽に近い今昔の感を催さない訣には行かなかつた。しかし僕等の大川へ水泳を習ひに行つたと言ふことも後世には不可解に感じられるであらう。現に今でも〇君などは「この川でも泳いだりしたものですかね」と少からず驚嘆してゐた。

僕は又この河岸にも昔に変わらないものを発見した。それは——生憎何の木かはちよつと僕には見当もつかない。が、兎に角新芽を吹いた昔の並み木の一本である。僕の覚えてゐる柳の木は一本も今では残つてゐない。けれどもこの木だけは何かの拍子に火事にも焼かれずに立つてゐるのであらう。僕は殆どこの木の幹に手を触れて見たい誘惑を感じた。のみならずその木の根元には子供を連れたお婆さんが二人曇天の大川を眺めながら、花見か何かにでも来てゐるやうに稲荷鮎を食べて話し合つてゐた。

本所会館の隣にあるのは建築中の同愛病院である。高い鉄の櫓だの、何階建かのコンクリートの壁だの、殊に砂利を運ぶ人夫だのは確かに僕を威圧するものだつた。同時に又工業地になつた「本所の玄関」といふ感じを打ち込まなければ措かないものだつた。僕は

半裸体の工夫こうふが一人、汗に体を輝かせながら、シヤベルを動かしてゐるのを見、本所全体もこの工夫のやうに烈しい生活をしてゐることを感じた。この界限かいわいの家々の上に五月幟のぼりの翻ひるがへつてゐたのは僕の小学時代の話である。今では、——誰も五月幟のぼりよりは新しい日本の年中行事になつたメイ・デイを思ひ出すのに違ひない。

僕は昔この辺にあつた「御蔵橋」と言ふ橋を渡り、度々友綱ともづなの家の側うちにあつた或友達うちの家へ遊びに行つた。彼も亦海軍の将校になつた後、二三年前ぜんに故人になつてゐる。

しかし僕の思ひ出したのは必しも彼のことばかりではない。彼の住んでゐた家のあたり、

——瓦屋根あひだの間に樹木じゆもくの見える横町よこちやうのことも思ひ出したのである。そこは僕の住ん

でゐた元町もとまち通りに比べると、はるかに人通りも少なければ「しもた家」も殆ど門並みだ

つた。「椎の木松浦しひ きまつうら」のあつた昔は暫く問はず、「江戸の横網よこあみ鶯の鳴く」と北原きたはらはく

白秋しう氏の歌つた本所ほんじよさへ今ではもう「歴史的 大川端おほかははた」にやつてしまつたと言ふ外は

ない。如何いかに万法ばんぽふは流転るてんするとはいへ、かういふ変化の絶え間まない都会は世界中にも珍

らしいであらう。

僕等はいつか工事場らしい板いたかこ圍こひの前に通りかかつた。そこにも労働者が二三人、せつせと槌つちを動かしながら、大きい花崗石くわかうせきを削けづつてゐた。のみならず工事中の鉄橋さへ泥

濁りに濁つた大川の上へ長々と橋梁はしげたを横たへてゐた。僕はこの橋の名前は勿論、この橋の出来る話も聞いたことはなかつた。震災は僕等の後うしろにある「富士見の渡し」を滅してしまつた。が、その代りに僕等の前に新しい鉄橋を造らうとしてゐる。……

「これは何なんといふ橋ですか？」

麦藁帽かぶを冠かぶつた労働者の一人は矢張り槌ひとりを動かしたまま、ちよつと僕の顔を見上げ、存ぞ外んぐわい親切に返事をした。

「これですか？ これは蔵前橋くらまえばしです。」

## 「一 銭 蒸 汽」

僕等はそこから引き返して川蒸汽かはじようきの客になる為に横網よこあみの浮き棧橋さんばしへおりて行つた。昔はこの川蒸汽も一銭蒸汽と呼んだものである。今はもう賃銭も一銭ではない。しかし五銭出しさへすれば、何区でも勝手に行ゆかれるのである。けれども屋根のある浮き棧橋は――震災は勿論この浮き棧橋ほのほも炎ほのほにして空へ立ち昇のぼらせたのであらう。が、一見した所は明治時代に変つてゐない。僕等はベンチに腰をおろし、一本の巻煙草に火をつけながら、川

蒸汽の来るのを待つことにした。「石垣にはもう苔が生えてゐますね。もつとも震災以来四五年になるが、……」

僕はふとこんなことを言ひ、O君の為に笑はれたりした。

「苔の生えるのは当り前であります。」

大川は前にも書いたやうに一面に泥濁りに濁つてゐる。それから大きい浚渫船が一艘起重機を擡げた向う河岸も勿論「首尾の松」や土蔵の多い昔の「一番堀」や「二番堀」ではない。最後に川の上を通る船も今では小蒸汽や達磨船である。五大力、高瀬船、伝馬、荷足、田船などといふ大小の和船も何時の間にか流転の力に押し流されたのであらう。僕はO君と話しながら、「沅湘日夜東に流れて去る」といふ支那人の詩を思ひ出した。かういふ大都会の中の川は沅湘のやうに悠々と時代を超越してゐることは出来ない。現世は実は大川さへ刻々に工業化してゐるのである。しかしこの浮き棧橋の上に川蒸汽を待つてゐる人々は、大抵大川よりも保守的である。僕は巻煙草をふかしながら、唐棧柄の着物を着た男や銀杏返しに結つた女を眺め、何か矛盾に近いものを感じない訣には行かなかつた。同時に又明治時代にめぐり合つた或懐しみに近いものを感じない訣には行かなかつた。そこへ下流から漕いで来たのは久振りに

見る<sup>ごだいりき</sup> 五大力である。艦<sup>へさき</sup>の高い五大力の上には鉢巻をした船頭<sup>せんどう</sup>が一人一丈余りの櫓<sup>ろ</sup>を押してゐた。それからお上<sup>かみ</sup>さんらしい女が一人御亭主<sup>ごていしゅ</sup>に負けずに竿を差してゐた。かういふ水上生活者の夫婦位妙に僕等にも抒情詩<sup>ぢよじやうし</sup>めいた心もちを起させるものは少ないかも知れない。僕はこの五大力を見送りながら、——その又五大力の上にある四五歳の男の子を見送りながら、幾分か彼等の幸福<sup>うちらや</sup>を羨<sup>うらや</sup>みたい気さへ起してゐた。

両国橋<sup>りやうこくばし</sup>をくぐつて来た川蒸汽はやつと浮き栈橋へ横着けになつた。「隅田丸<sup>すみだまる</sup>三十号<sup>ごう</sup>」(?)——僕は或はこの小蒸汽に何度も前に乗つてゐるのであらう。兎<sup>と</sup>に角<sup>かく</sup>これも明治時代<sup>めいじ</sup>にやつてゐないことは確かである。川蒸汽の中は満員<sup>まんげん</sup>だつた上、立つてゐる客も少くない。僕等はやむを得ず舟<sup>ふね</sup>ばたに立ち、薄日<sup>うすび</sup>の光に照らされた兩岸の景色を見て行くことにした。尤も船<sup>ふね</sup>ばたに立つてゐたのは僕等二人に限<sup>かぎ</sup>つた訣<sup>わけ</sup>ではない。僕等の前<sup>まへ</sup>には夏<sup>なつ</sup>外<sup>わいたう</sup>套<sup>たう</sup>を着た、鬚<sup>あごひげ</sup>の長い老人さへやはり船<sup>ふね</sup>ばたに立つてゐたのである。

川蒸汽は静かに動き出した。すると大勢<sup>おほぜい</sup>の客の中に忽ち「毎度御やかましようございませう」と甲<sup>かんだか</sup>高い声を出しはじめたのは絵葉書や雑誌を売る商人である。これも亦昔<sup>また</sup>にやつてゐない。若し少しでもやつてゐるとすれば、「何ごとも活動ばやりの世の中でございませうから」などと云ふ言葉を挾<sup>はさ</sup>んでゐることであらう。僕はまだ小学時代からかう云ふ商

人の売つてゐるものを一度も買つた覚えはない。が、天窓越しに彼の姿を見おろし、ふと僕の小学時代に伯母をばと一しよに川蒸汽へ乗つた時のことを思ひ出した。

### 乗り継ぎ「一銭蒸汽」

僕等はその時にどこへ行つたのか、兎とに角伯母かくをばだけは長命寺ちやうめいじの桜餅ひとかごひぎを一籠膝ひとかごひぎにしてゐた。すると男女の客ふたりが二人、僕等の顔を尻目しりめにかけながら、「何か勻ひますね」「うん、糞臭くそくさいな」などと話しはじめた。長命寺の桜餅を糞臭いとは、——僕は未だいまに生意氣なまいきにもこの二人を田舎者あなかもめと軽蔑あやむしたことを覚えてゐる。長命寺にも震災以来一度も足を入れたことはない。それから長命寺の桜餅は、——勿論今でも昔のやうに評判の善いいことは確かである。しかし餌あんや皮あにあつた野趣やしゆだけはいつか失はれてしまつた。……

川蒸汽は蔵前橋くらまへばしの下をくぐり、廐橋うまやばしへ真直まつすぐに進んで行つた。そこへ向うから僕等の乗つたのとあまり変らない川蒸汽が一艘矢張り浪なみを蹴やつて近づき出した。が、七八間隔おててすれ違つたのを見ると、この川蒸汽の後部には甲板かんぱんの上に天幕テントを張り、ちやんと大お川ほかはの兩岸の景色を見渡せる設備も整つてゐた。かういふ古風な川蒸汽も亦目またまぐるしい

時代の影響を蒙らない訣には行かないらしい。その後へ向うから走つて来たのはお客や芸者に乗せたモオタアボオトである。屋根船や船宿を知つてゐる老人達は定めしこのモオタアボオトに苦々しい顔をすることであらう。僕は江戸趣味に随喜する者ではない。従つて又モオタアボオトを無風流と思ふ者ではない。しかし僕の小学時代に大川に浪を立てるものは「一銭蒸汽」のあるだけだつた。或はその外に利根川通ひの外輪船のあるだけだつた。僕は渡し舟に乗る度に「一銭蒸汽」の浪の来ることを、——このうねうねした浪の為に舟の揺れることを恐れたものである。しかし今日の大川の上に大小の浪を残すものは一々数へるのに耐へないであらう。

僕は船端に立つたまま、鼠色に輝いた川の上を見渡し、確か広重も描いてゐた河童のことを思ひ出した。河童は明治時代には、——少くとも「御維新」前後には大根河岸の川にさへ出沒してゐた。僕の母の話に依れば、観世新路に住んでゐた或男やもめの植木屋とかは子供のおしめを洗つてゐるうちに大根河岸の川の河童に腋の下をくすぐられたと言ふことである。（観世新路に植木屋の住んでゐたことさへ僕等にはもう不思議である。）まして大川にゐた河童の数は決して少くはなかつたであらう。いや、必しも河童ばかりではない。僕の父の友人の一人は夜網を打ちに出てゐたところ、何か舫へ上つたのを見

ると、甲羅<sup>かから</sup>だけでも盥<sup>たらひ</sup>ほどあるすつぽんだつたなどと話してゐた。僕は勿論かういふ話を<sup>ことごと</sup>尽く事実とは思つてゐない。けれども明治時代——或は明治時代以前の人々はこれ等の怪物<sup>もくげき</sup>を目撃<sup>めくげき</sup>する程この町中<sup>まちなか</sup>を流れる川に詩的恐怖を持つてゐたのであらう。

「今ではもう河童<sup>かづぼ</sup>もゐないでせう。」

「かう泥だの油だの一面に流れてゐるのではね。——しかしこの橋の下あたりには年を取つた河童の夫婦が二匹<sup>いまいま</sup>未だに住んでゐるかも知れません。」

川蒸気は僕等の話の中に<sup>うち</sup>厩<sup>うまやばし</sup>橋の下へはひつて行つた。薄暗い橋の下だけは浪の色もさすがに蒼<sup>あを</sup>んでゐた。僕は昔は渡し舟へ乗ると、——いや、時には橋を渡る時さへ、磯<sup>いそく</sup>臭<sup>さ</sup>い匂<sup>におひ</sup>のしたことを思ひ出した。しかし今日<sup>こんにち</sup>の大川の水は何の匂<sup>におひ</sup>も持つてゐない。若し又持つてゐるとすれば、唯泥臭い匂<sup>におひ</sup>だけであらう。……

「あの橋は今度出来る駒形<sup>こまかたばし</sup>橋ですなね？」

○君は生憎<sup>あいにく</sup>僕の間に答へることは出来なかつた。駒形<sup>こまかた</sup>は僕の小学時代には大抵<sup>たいてい</sup>

「コマカタ」と呼んでゐたものである。が、それもとうの昔に「コマガタ」と発音するやうになつてしまつた。「君は今駒形<sup>こまかた</sup>あたりほとゝぎす」を作つた遊女も或は「コマカタ」と澄んだ音を「ほとゝぎす」の聲に響かせたかつたかも知れない。支那人は「文章は千古

の事」と言つた。が、文章もおのづから勻を失つてしまふことは大川の水に変わらないのである。

## 柳島

僕等は川蒸汽を下りて吾妻橋の袂へ出、そこへ来合せた円タクに乗つて柳島へ向ふことにした。この吾妻橋から柳島へ至る電車道は前後に二三度しか通つた覚えはない。まして電車の通らない前には一度も通つたことはなかつたであらう。一度も?——若し一度でも通つたとすれば、それは僕の小学時代に業平橋かどこかにあつた或可也大きい寺へ葬式に行つた時だけである。僕はその葬式の帰りに確か父に「御維新」前の本所の話をして貰つた。父は往來の左右を見ながら、「昔はここいらは原ばかりだつた」とか「何とか様の裏の田には鶴が下りたものだ」とか話してゐた。しかしそれ等の話の中でも最も僕を動かしたものは「御維新」前には行き倒れとか首縊りとかの死骸を早桶に入れ、その又早桶を葭簀に包んだ上、白張りの提灯を一本立てて原の中に据ゑて置くこと云ふ話だつた。僕は草原の中に立つた白張の提灯を想像し、何か気味の悪い美しさを感

じた。しかも彼かれ是真夜中まよなかになると、その早桶のおのづからごろりと転げるといふに至つては、——明治時代の本所はたとひ草原には乏しかつたにもせよ、恐らくまだこのあたりは多少いほゆる所謂「御朱引き外」ごしゆび せとの面かけをとどめてゐたのであらう。しかし今はどこを見ても、唯電柱やバラツクの押し合ひへし合ひしてゐるだけである。僕は泥のはねかかつたタクシイの窓越しに往來わうらいを見ながら、金錢を武器にする修羅界しゆらかいの空氣を憂鬱ゆううつに感じるばかりだつた。

僕等はしもとは「橋本」の前で円タクをおり、水のどす黒い掘割り伝かめんどひに亀井戸てんじんさまの天神様へ行つて見ることにした。名高い柳島やなぎしまの「橋本」も今は食堂もつとに變つてゐる。尤もこの家は焼けずにすんだらしい。現に古風な家の一部や荒れ果てた庭なども残つてゐる。けれども磨すり硝子ガラスへ緑いろに「食堂」と書いた軒燈けんとうは少くとも僕にははかなかつた。僕は勿論「橋本」の料理を云々うんぬんするほどの通人つうじんではない。のみならず「橋本」へ来たことさへあるかないかわからない位である。が、五代目菊五郎きくごろうの最初の脳溢血なういつけつを起したのは確かこの「橋本」の二階だつたであらう。

掘割りを隔てた妙見様めうけんさまも今ではもうすっかり裸になつてゐる。それから掘割りに沿うた往來わうらいも、——僕は中学時代に蕪村句集ぶそんを読み、「君行くや柳緑に路長し」といふ句に

出合つた時、この往来にあつた柳を思ひ出さずにはゐられなかつた。しかし今僕等の歩いてゐるのは有田ドラツグや愛聖館の並んだ、せせこましいなりに賑かな往来である。近頃私娼の多いとか云ふのも恐らくはこの往来の裏あたりであらう。僕は浅草千束町にまだ私娼の多かつた頃の夜の景色を覚えてゐる。それは窓ごとに火かげのさした十二階の聳えてゐる為に殆ど荘嚴な氣のするものだつた。が、この往来はどちらへ抜けてもボオドレエルの色彩などは全然見つかからないのに違ひない。たとひデカダンスの詩人だつたとしても、僕は決してかう云ふ町裏を徘徊する氣にはならなかつたであらう。けれども明治時代の諷刺詩人、斎藤緑雨は十二階に悪趣味そのものを見出してゐた。すると明日の詩人たちは有田ドラツグや愛聖館にも彼等自身の「悪の花」を——或は又「善の花」を歌ひ上げることになるかも知れない。

### 萩寺あたり

僕は碌でもないことを考へながら、ふと愛聖館の掲示板を見上げた。するとそこに書いてあるのは確かかういふ言葉だつた。

「神様はこんなにくさんの人間をお造りになりました。ですから人間を愛していらつしやいます。」

産児制限論者は勿論、現世げんせいの人々はいふ言葉に微笑しない訣わけにはゆかないであらう。人口過剰に苦しんでゐる僕等はこんなにくさんの人間のあることを神の愛の証しょうこ掘こと思ふことは出来ない。いや、寧ろ全能の主しゅの憎しみの証拠とさへ思はれるであらう。しかし本所ほんじよの或場末ぼすゑの小学生を教育してゐる僕の旧友の言葉に依れば、少くともその界かいわ限いに住んでゐる人々は子供の数の多い家ほど反つて暮らしも楽だと云ふことである。それは又どの家の子供も兎とに角かく十か十一になると、それぞれ子供なりに一日の賃金を稼かせいで来るからだと言ふことである。愛聖館あいせいぐわんの掲示板にかういふ言葉を書いた人は或はこの事実を知らなかつたかも知れない。が、確にかういふ言葉は現世ほんじよの本所ほんじよの或場末ぼすゑに生活してゐる人々の気持ちを代辯することになつてゐるであらう。尤も子供もつとの多い程暮らしも楽だといふことは子供自身には仕合せかどうか、多少の疑問のあることは事実である。

それから僕等は通りがかりにちよつと萩寺はぎでらを見物した。萩寺も突つかひ棒はしてあるものの、幸ひ震災に焼けずにすんだらしい。けれども萩の四五株しかない上、落合直おちあひなほぶ文先生みの石碑を前にした古池の水も渴かれ渴がれになつてゐるのは哀れだつた。ただこの古

池に臨んだ茶室だけは昔よりも一層もの寂びてゐる。僕は萩寺の門を出ながら、昔は本所の猿江にあつた僕の家の菩提寺を思ひ出した。この寺には何でも司馬江漢や小林平八郎の墓の外に名高い浦里時次郎の比翼塚も残つてゐたものである。僕の司馬江漢を知つたのは勿論余り古いことではない。しかし義士の討入りの夜に両刀を揮つて鬪つた振り袖姿の小林平八郎は小学時代の僕等には実に英雄そのものだつた。それから浦里時次郎も、——僕はあらゆる東京人のやうに芝居には悪縁の深いものである。従つて矢張り小学時代から浦里時次郎を尊敬してゐた。(けれども正直に白状すれば、はじめて浦里時次郎を舞台の上に見物した時、僕の恋愛を感じたものは浦里よりも寧ろ禿だつた。)この寺は——慈眼寺といふ日蓮宗の寺は震災よりも何年か前に染井の墓地のあたりに移転してゐる。彼等の墓も寺と一しよに定めし同じ土地に移転してゐるであらう。が、あのじめ／＼した猿江の墓地は未だに僕の記憶に残つてゐる。就中薄い水苔のついた小林平八郎の墓の前に曼珠沙華の赤々と咲いてゐた景色は明治時代の本所以外に見ることの出来ないものだつたかも知れない。

萩寺の先にある電柱(?)は「亀井戸天神近道」といふペンキ塗りの道標を示してゐた。僕等はその横町を曲り、待合やカフェの軒を並べた、狭苦しい往來を歩

いて行つた。が、肝腎かんじんの天神様へは容易よういに出ることも出来なかつた。すると道ばたに女の子ひとりが一人メリンスの袂たもとを翻しながら、傍若無人ぼうじやくぶじんにゴム毬まりをついてゐた。

「天神様へはどう行きますか？」

「あつち。」

女の子は僕等に返事をした後のち、聞えよがしにこんなことを言つた。

「みんな天神様のことばかり訊くのね。」

僕はちよつと忌々いまいましさを感じ、この如何いかにもこましやくれた十とをばかりの女の子を振り返つた。しかし彼女は側目わきめも振らずに（しかも僕に見られてゐることをはつきり承知してゐながら）矢張り毬まりをつき続けてゐた。實際支那人の言つたやうに「変らざるものよりして之を見れば」何ごとも変らないのに違ひない。僕も亦また僕の小学時代には鉄面皮てつめんぴにも生き薬屋くすりやへ行つて「半紙はんしを下さい」などと言つたものだつた。

## 「天神様」

僕等は門並かしのなみの待合まちあひの間をやつと「天神様てんじんさま」の裏門うらへ辿りつたどいた。するとその門の

中には夏外套を着た男が一人、何か滔々としやべりながら、「お立ち合ひ」の人々へ小さい法律書売りつけてゐた。僕は彼の雄辯に辟易せずにはゐられなかつた。が、この人ごみを通りこすと、今度は背広を着た男が一人最新化学応用の目薬と云ふものを売りつけてゐた。この「天神様」の裏の広場も僕の小学時代にはなかつたものである。しかし広場の出来た後にもここにかかる見世物小屋は活き人形や「からくり」ばかりだつた。

「こつちは法律、向うは化学——ですね。」

「亀井戸も科学の世界になつたのでせう。」

僕等はこんなことを話し合ひながら、久しぶりに「天神様」へお詣りに行つた。「天神様」の拝殿は仕合せにも昔に變つてゐない。いや、昔に變つてゐないのは筆塚や石の牛も同じことである。僕は僕の小学時代に古い筆を何本も筆塚へ納めたことを思ひ出した。

(が、僕の字は何年たつても、一向上達する容子は無い。)それから又石の牛の額へ錢を投げてのせることに苦心したことも思ひ出した。かう云ふ時に投げる錢は今のやうに一錢銅貨ではない。大抵は五厘錢か寛永通宝である。その又穴錢の中の文錢を集め、所謂「文錢の指環」を拵へたのも何年前の流行であらう。僕等は拝殿の前へ立ち止まり、ちよつと帽をとつてお時宜をした。

「太鼓橋も昔の通りですか？」

「ええ、——しかしこんなにかつたかな。」

「子供の時に大きいと思つたものは存外あとでは小さいものですね。」

「それは太鼓橋ばかりぢやないかも知れない。」

僕等は暖簾をかけた掛け茶屋越しにどんより水光りのする池を見ながら、やつと短い花房を垂らした藤棚の下を歩いて行つた。この掛け茶屋や藤棚もやはり昔に變つてゐない。しかし木の下や池のほとりに古人の句碑の立つてゐるのは僕には何か時代錯誤を感じさせない訣には行かなかつた。江戸時代に興つた「風流」は江戸時代と一しよに滅んでしまつた。唯僕等の明治時代はまだどこかに二百年間の「風流」の匂を残してゐた。けれども今は目のあたりに、——O君はにやにや笑ひながら、恐らくは君自身は無意識に僕にこの矛盾を指し示した。

「カルシウム煎餅も売つてゐますね。」

「ああ、あの大きい句碑の前にね。——それでもまだ張り子の亀の子は売つてゐる。」

僕等は、「天神様」の外へ出た後、「船橋屋」の葛餅を食ふ相談をした。が、本所に疎遠になつた僕には「船橋屋」も容易に見つからなかつた。僕はやむを得ず荒物屋

の前に水を撒いてゐたお上さんに田舎者らしい質問をした。それから花柳病の医院の前をやつと又船橋屋へ辿り着いた。船橋屋も家は新たになつたものの、大体は昔に變つてゐない。僕等は縁台に腰をおろし、鴨居の上にかけて並べた日本アルプスの写真を見ながら、葛餅を一盆づつ食ふことにした。

「安いものですね、十銭とは。」

○君は大いに感心してゐた。しかし僕の中学時代には葛餅も一盆三銭だつた。僕は僕の友だちと一しよに江東梅園などへ遠足に行つた帰りに度たびこの葛餅を食つたものである。江東梅園も臥龍梅と一しよに滅びてしまつてゐるであらう。水田や榛の木であつた亀井戸はかう云ふ梅の名所だつた為に南画らしい趣を具へてゐた。が、今は船橋屋の前も広い新開の往來の向うに二階建の商店が何軒も軒を並べてゐる。……

## 錦糸堀

僕は天神橋の袂から又円タクに乗ることにした。この界限はどこを見ても、——僕はもう今昔の変化を云々するのにも退屈した。僕の目に触れるものは半ば出来上つ

た小公園である。或は亜鉛塀トタンベを繞めぐらした工場である。或は又見すばらしいバラックである。齋藤茂吉氏さいとうもきちは何かの機会に「ものの行きとどまらぬやも」と歌ひ上げた。しかし今こんにち日の本所ほんじよは「ものの行き」を現してゐない。そこにあるものは震災の為に生じた「ものの飛び」に近いものである。僕は昔この辺に糧秣りやうまつしやう廠ちやうのあつたことを思ひ出し、更にその糧秣廠に火事のあつたことを思ひ出し、如露亦如電にようやくによでんといふ言葉の必しも誇張かならずでないことを感じた。

僕の通かよつてゐた第三中学校も鉄筋コンクリートに變つてゐる。僕はこの中学校へ五年の間あひだ通ひつづけた。当時の校舎も震災の為に灰になつてしまつたのであらう。が、僕の中学時代には鼠色のペンキを塗つた二階建の木造だつた。それから校舎のまはりにはポプラアが何本かそよいでゐた。(この界限かいがいは土の瘦やせてゐる為にポプラ以外の木は育たくち悪にくかつたのである。)僕はそこへ通つてゐるうちに英語や数学を覚えた外ほかにも如何いかに僕等人間の情け無いものであるかを經驗した。かう云ふのは僕の先生たちや友だちの悪口わるぐちを言つてゐるのではない。僕等人間と云ふうちには勿論僕のこととはひつてゐるのである。たとへば僕等は或友だちをいぢめ、彼を砂の中に生き埋めにした。僕等の彼をいぢめたのは格別理由のあつた訣わけではない。若し又理由らしいものを挙げるとすれば、唯彼の生意氣なまいきだつ

た、——或は彼は彼自身を容易に曲げようとしなかつたからである。僕はもう五六年前、  
久しぶりに彼とこの話をし、この小事件も彼の心に暗い影を落してゐるのを感じた。彼は  
今は揚子江の岸に不相変孤独に暮らしてゐる。……

かう云ふ僕の友だちと一しよに僕の記憶に浮んで来るのは僕等を教へた先生たちである。  
僕はこの「繁昌記」の中に一々そんな記憶を加へるつもりはない。けれども唯一人この  
機会にスケッチしておきたいのは山田先生である。山田先生は第三中学校の剣道部と云ふ  
ものの先生だつた。先生の剣道は封建時代の劍客に勝るとも劣らなかつたであらう。  
何でも先生に学んだ一人は武徳会の大会に出、相手の小手へ竹刀を入れると、余り気合ひ  
の烈しかつた為に相手の腕を一打ちに折つてしまつたとか云ふことだつた。が、僕の伝へ  
たいのは先生の剣道のことばかりではない。先生は又食物を減じ、仙人に成る道も修行  
してゐた。のみならず明治時代にも不老不死の術に通じた、正真紛れのない仙人の住  
んでゐることを確信してゐた。僕は不幸にも先生のやうに仙人に敬意を感じてゐない。し  
かし先生の鍛煉にはいつも敬意を感じてゐる。先生は或時博物学教室へ行き、そこにあ  
つたコツプの昇汞水を水と思つて飲み干してしまつた。それを知つた博物学の先生は  
驚いて医者を迎へにやつた。医者は勿論やつて来るが早いのか、先生に吐剤を飲ませようと

した。けれども先生は吐剤と云ふことを知ると、自若としてかう云ふ返事をした。

「山田次郎吉は六十を越しても、まだ人様のゐられる前でへどを吐くほど耄碌はしませぬ。どうか車を一台お呼び下さい。」

先生は何か云ふ法を行ひ、とうとう医者にもかからずにしまった。僕はこの三四年の間は誰からも先生の噂を聞かない。あの面長の山田先生は或はもう列仙伝中の人々と一しよに遊んでゐるのであらう。しかし僕は不相変埃臭い空気の中に、——僕等をのせた円タクは僕のそんなことを考へてゐるうちに江東橋を渡つて走つて行つた。

## 緑町、亀沢町

江東橋を渡つた向うもやはりバラツクばかりである。僕は円タクの窓越しに赤錆びついた亜鉛屋根だのペンキ塗りの板目だのを見ながら、確か明治四十三年にあつた大水のことを思ひ出した。今日の本所は火事には会つても、洪水に会ふことはないであらう。が、その時の大水は僕の記憶に残つてゐるのでは一番水嵩の高いものだった。江東橋界限の人々の第三中学校へ避難したのもやはりこの大水のあつた時である。僕は

江東橋を越えるのにも一面に漲つた泥水の中を泳いで行かなければならなかつた。……

「實際その時は大変でしたよ。尤も僕の家などは床の上へ水は来なかつたけれども。」

「では浅い所もあつたのですね?」

「緑町二丁目——かな。何でもあの辺は膝位まででしたがね。僕はSと云ふ友だちと一しよにその露地の奥にゐるもう一人の友だちを見舞ひに行つたんです。するとSと云ふ友だちが溝の中へ落ちてしまつてね。……」

「ああ、水が出てゐたから、溝のあることがわからなかつたんですね。」

「ええ、——しかしSのやつは膝まで水の上に出てゐたんです。それがあつと言ふ拍子に可也深い溝だつたと見え、水の上に出てゐるのは首だけになつてしまつたんでせう。僕は思はず笑つてしまつてね。」

僕等をのせた円タクはかう云ふ僕等の話の中に、寿座の前を通り過ぎた。画看板を掲げた寿座は余り昔と変らないらしかつた。僕の父の話によれば、この辺、——二つ目通りから先は「津軽様」の屋敷だつた。「御維新」前の或年の正月、父は川向うへ年始に行き、帰りに両国橋を渡つて来ると、少しも見知らない若侍が一人偶然父と道づれになつた。彼もちやんと大小をさし、鷹の羽の紋のついた上下を着てゐた。父は彼と話

してゐるうちにいつか僕の家を通り過ぎてしまった。のみならずふと気づいた時には「津軽様」の溝の中へ転げこんでゐた。同時に又若侍はいつかどこかへ見えなくなつてゐた。父は泥まみれになつたまま、僕の家へ歸つて来た。何でも父の刀は鞘走つた拍子にさかさまに溝の中に立つたと云ふことである。それから若侍に化けた狐は（父は未だこの若侍を狐だつたと信じてゐる。）刀の光に恐れた為にやつと逃げ出したのだと云ふことである。實際狐の化けたかどうかは僕にはどちらでも差支へない。僕は唯父の口からかう云ふ話を聞かされる度にいつも昔の本所の如何に寂しかつたかを想像してゐた。

僕等は亀沢町の角で円タクをおり、元町通りを両国へ歩いて行つた。菓子屋の寿徳庵は昔のやうにやはり繁昌してゐるらしい。しかしその向うの質屋の店は安田銀行に變つてゐる。この質屋の「利いちやん」も僕の小学時代の友だちだつた。僕はいつか遊び時間に僕等の家にあるものを自慢し合つたことを覚えてゐる。僕の友だちは僕のやうに年とつた小役人の息子ばかりではない。が、誰も「利いちやん」の言葉には驚嘆せずにはゐられなかつた。

「僕の家の中には大砲万右衛門の化粧廻しもある。」

大砲は僕等の小学時代に、——常陸山や梅ヶ谷の大関だつた時代に横綱を張つた相

撲まふだつた。

## 相生町

本所ほんじよ警察署もいつの間にかコンクリートの建物に変わつてゐる。僕の記憶にある警察署は古い赤煉瓦れんぐわの建物だつた。僕はこの警察署長の息子むすこも僕の友だちだつたのを覚えてゐる。それから警察署の隣となりにある蝙蝠傘屋かうもりがさやも——傘屋の木島きしまさんは今日こんにちでも僕のことを覚えてゐてくれるであらうか？ いや、木島さん一人ひとりではない。僕はこの界限かいわいに住んでゐた大勢おほぜいの友だちを覚えてゐる。しかし僕の友だちは長い年としつき月の流れるのにつれ、もう全然僕などとは縁のない暮らしをしてゐるであらう。僕は四五年前まへの簡閲かんえつてんこ点呼おほがに大紙屋おほがみの岡本おかもとさんと一しよになつた。僕の知つてゐた大紙屋は封建時代てんけんじだいに變りのない土蔵造りの紙屋である。その又薄暗い店の中には番頭ばんとうや小僧こぞうが何人も忙いそがしさうに歩きまはつてゐた。が、岡本さんの話によれば、今では店の組織も變り、海外へ紙を輸出するのにもいろいろ計画を立ててゐるらしい。

「この辺もすっかり變つてゐますか？」

「昔からある店もありますけれども、……町全体の落ち着かなさ加減はね。」

僕はその大紙屋おほかみやのあつた「馬車通り」(「馬車通り」と云ふのは四つ目あたりへ通ふガタ馬車のあつた為である。)のぬかるみを思ひ出した。しかしまだ明治時代にはそこにも大紙屋のあつたやうに封建時代の影の落ちた何軒かの「しにせ」は残つてゐた。僕はこの馬車通りにあつた「魚善うをぜん」といふ肴屋さかなやを覚えてゐる。それから又樋口ひぐちさんといふ門構への医者覚えてゐる。最後にこの樋口ひぐちさんの近所にピストル強盜清水定吉しみづさだきちの住んでゐたことを覚えてゐる。明治時代もあらゆる時代のやうに何人かの犯罪的天才を造り出した。ピストル強盜も稲妻強盜いなづまや五寸釘ぐきの虎吉とらきちと一しよにかう云ふ天才たちの一人だつたであらう。僕は彼の按摩あんまになつて警官の目をくらませてゐたり、彼の家の壁をがんどう返しにして出没を自在にしてゐたことにロマン趣味を感じずにはゐられなかつた。これ等の犯罪的天才は大抵たいていは小説の主人公になり、更に又所謂壯士芝居さいらの劇中人物になつたものである。僕はいふ壮士芝居の中に「大悪僧だいくそう」とか云ふものを見、一場々ひとばの血なまぐささに夜も碌々ろくろく眠られなかつた。尤もこの「大悪僧」は或はピストル強盜のやうに實在の人物ではなかつたかも知れない。

僕等はいつか埃ほこりの色をした国技館こくぎくわんの前へ通りかかつた。国技館は丁度日光ちやうどにつくわうの東

照宮の模型か何かを見世物にしてゐる所らしかつた。僕の通つてゐた江東小学校は丁度ここに建つてゐたものである。現に残つてゐる大銀杏も江東小学校の運動場の隅に、——といふよりも附属幼稚園の運動場の隅に枝をのばしてゐた。当時の小学校の校長の震災の為に死んだことは前に書いた通りである。が、僕はつい近頃やはり当時から在職してゐたT先生にお目にかかり、女生徒に裁縫を教へてゐた或女の先生も割り下水に近い京極子爵家(?)の溝の中に死んだことを知つたりした。この先生は着物は腐れ、体は骨になつてゐるものの、貯金帳だけはちやんと残つてゐた為にやつと誰だかわかつたさうである。T先生の話によれば、僕等を教へた先生たちは大抵は本所にゐないらしい。僕は比留間先生に張り倒されたことを覚えてゐる。それから宗先生に後頭部を突かれたことを覚えてゐる。それから葉若先生に、——けれども僕の覚えてゐるのは体罰を受けたことばかりではない。僕は又この小学校の中にいろいろの喜劇のあつたことも覚えてゐる。殊に大島と云ふ僕の親友のちやんと机に向つたまま、いつかうんこをしてゐたのは喜劇中の喜劇だつた。しかしこの大島敏夫も——花や歌を愛してゐた江東小学校の秀才も二十前後に故人になつてゐる。……

国技館の隣りに回向院のあることは大抵誰でも知つてゐるであらう。所謂本場所

の相撲すまふも亦また国技館こくぎくわんの出来ない前まへには回向院ゑかういんの境内けいだいに蓆むしろ張はりの小屋こやをかけてゐたものである。僕等ぼくらはこの義士ぎしの打ち入り以来いらい、名高なだかい回向院ゑかういんを見る為ために国技館こくぎくわんの横よこを曲まつて行いつた。が、それもここへ来る前まへにひそかに僕の予期よきしてゐたやうにすつかり昔むかしに變かつてゐた。

## 回向院

今日こんにちの回向院ゑかういんはバラツクである。如何いかに金きんの紋もんを打うつた亜鉛トタン葺ぶきの屋根やねは反そつてゐても、硝子戸ガラスを立てた本堂ほんだうはバラツクと云いふ外ほかに仕しかたはない。僕等ぼくらは読どきやうの聲こゑを聞きながら、やはり僕ぼくには昔馴染むかしなじみの鼠小僧ねずみこぞうの墓はかを見物けんぶつに行いつた。墓はかの前まへには今日こんにちでも乞こ食じきが三四人集あつてゐた。が、そんなことはどうでも善よい。それよりも僕ぼくを驚おどかしたのは膾を炙いつせいの舘たて供養塔くわうたうと云いふものの立たつてゐたことである。僕ぼくはぼんやりこの石碑せきいを見上げ、何かその奥おくの鼠小僧ねずみこぞうの墓はかに同情どうじやうしない訣わけには行いかなかつた。

鼠小僧ねずみこぞう治郎太夫ぢらうだいふの墓はかは建たてふ札ふだも示ししてゐる通り、震災しんさいの火事かじにも滅めびなかつた。赤あかい提灯ちやうちんや蝋燭ろうそくや教覚けうかく速善居士そくぜんこじの額がくも大体昔むかしの通りである。尤もつとも今は墓はかの石いしを欠かか

れない用心のしてあるばかりではない。墓の前の柱にちやんと「御用のおかたにはお守り石をさし上げます」と書いた、小さい紙札も貼りつけてある。僕等はこの墓を後ろにし、今度は又墓地の奥に、——国技館の後ろにある京伝の墓を尋ねて行つた。

この墓地も僕にはなつかしかつた。僕は僕の友だちと一しよに度たびいたづらに石塔を倒し、寺男や坊さんに追ひかけられたものである。尤も昔は樹木も茂り、一口に墓地と云ふよりも卵塔場と云ふ氣のしたものだつた。が、今は墓石は勿論、墓を繞つた鉄柵にも凄まじい火の痕は残つてゐる。僕は「水子塚」の前を曲り、京伝の墓の前へ辿り着いた。京伝の墓も京山の墓と一しよにやはり昔に變つてゐない。唯それ等の墓の前に柿か何かの若木が一本、ひよろりと枝をのばしたまま、若葉を開いてゐるのは哀れだつた。

僕等は回向院の表門を出、これもバラツクになつた坊主軍鶏を見ながら、一つ目の橋へ歩いて行つた。僕の記憶を信ずるとすれば、この一つ目の橋のあたりは大正時代にも幾分か広重らしい画趣を持つてゐたものである。しかしもう今日ではどこにもそんな景色は残つてゐない。僕等は無慙にもひろげられた路を向う両国へ引き返しながら、偶然「泰ちやん」の家の前を通りかかつた。「泰ちやん」は下駄屋の息子である。僕は僕の

小学時代にも作文は多少上手じやうずだつた。が、僕の作文は、——と云ふよりも僕等の作文は、  
 大抵たいていは所謂いはゆる美文だつた。「富士の峯白くかりがね池の面おもてに下り、空仰げば月麗うるはしく、  
 余が影法師黒し。」——これは僕の作文ではない。二三年前まへに故人になつた僕の小学時代  
 の友だちの一人ひとり、——清水昌彦君の作文である。「泰ちやん」はかう云ふ作文の中にひ  
 とり教科書の勻にほひのない、活き活きした口語文を作つてゐた。それは何でも「虹」といふ作  
 文の題の出た時である。僕は内心僕の作文の一番なることを信じてゐた。が、先生の一  
 番にしたのは「泰ちやん」——下駄屋「伊勢甚いせじん」の息子木村泰助君の作文だつた。「泰  
 ちやん」は先生の命令を受け、彼自身の作文を朗読らうどくした。それは恐らくは誰よりも僕を  
 動かさずにはおかなかつた。僕は勿論「泰ちやん」の為に見事に敗北を受けたことを感じ  
 た。同時に又「泰ちやん」の描あがいた「虹」にありありと夕立ちの通り過ぎたのを感じた。  
 僕を動かした文章は東西に亘わたつて少くはない。しかしまづ僕を動かしたのはこの「泰ちや  
 ん」の作文である。運命は僕を売文の徒にした。若し「泰ちやん」も僕のやうにペンを執と  
 つてゐたとすれば、「大東京繁昌記はんじやうき」の読者はこの「本所ほんじよ 両国りやうこく」よりも或は数等  
 美しい印象記を読んでゐたかも知れない。けれども「泰ちやん」はどうしてゐるであらう  
 ？ 僕は幾つも下駄の並んだ飾り窓の前に佇たたずんだまま、そつと店の中へ目を移した。店の

中には「泰ちゃん」のお母さんらしい人が一人坐つてゐる。が、木村泰助君は生憎どこにも見えなかつた。……

## 方丈記

僕「今日は本所ほんじよへ行つて来ましたよ。」

父「本所もすつかり變つたな。」

母「うちの近所はどうなつてゐるえ？」

僕「どうなつてゐるつて、……釣竿屋の石井いしゐさんにうちを売つたでせう。あの石井さんのあるだけです。ね。ああ、それから提灯屋ちやうちんやもあつた。……」

伯母をば「あすこには洗湯せんたうもあつたでせう。」

僕「今でも常磐湯ときはゆと云ふ洗湯はありますよ。」

伯母「常磐湯と言つたかしら。」

妻「あたしのゐた辺へんも變つたでせうね？」

僕「變らないのは石河岸いしがしだけだよ。」

妻「あすこにあつた、大きい柳は？」

僕「柳などは勿論焼けてしまつたさ。」

母「お前のまだ小さかつた頃には電車も通つてゐなかつたんだからね。」

父「うへの上野と新橋との間さへあひだ鉄道馬車があつただけなんだから。——鉄道馬車と云ふ度に思ひ出すのは……」

僕「僕の小便をしてしまつた話でせう。満員の鉄道馬車に乗つたまま。……」

伯母「さうさう、赤いフランネルのズボン下をはいて、……」

父「何、あの鉄道馬車会社の神戸かんべさんのことさ。神戸さんもこの間あひだ死んでしまつたな。」

僕「東京電燈の神戸かんべさんでせう。へええ、神戸さんを知つてゐるんですか？」

父「知つてゐるとも。大倉おほくらさんなども知つてゐたもんだ。」

僕「大倉喜八郎きはちろうをね……」

父「僕もあの時分にどうかすれば、……」

僕「もうそれだけで沢山たくさんですよ。」

伯母「さうだね。この上損でもされてゐた日には……」（笑ふ）

僕「『はん榛のきばば木馬場』あたりはかたなしですね。」

父「あすこには葛飾北斎が住んでゐたことがある。」

僕「『割り下水』もやつぱり変つてしまひましたよ。」

母「あすこには悪御家人が沢山ゐてね。」

僕「僕の覚えてゐる時分でも何かそんな気のする所でしたね。」

妻「お鶴さんの家はどうなつたでせう？」

僕「お鶴さん？ ああ、あの藍間屋の娘さんか。」

妻「ええ、兄さんの好きだつた人。」

僕「あの家どうだつたかな。兄さんの為にも見て来るんだつて。尤も前は通つたんだだけども。」

「」

伯母「あたしは地震の年以來一度も行つたことはないんだから、——行つても驚くだらうけれども。」

「」

僕「それは驚くだけです。伯母さんには見当もつかないかも知れない。」

父「何しろ変りも變つたからね。そら、昔は夕がたになると、みんな門を細目にあけて往来を見てゐたもんだらう？」

「」

母「法界節や何かの歸つて来るのをね。」

伯母「あの時分は蝙蝠も沢山ゐたでせう。」

僕「今は雀さへ飛んでゐませんよ。僕は実際無常を感じてね。……それでも一度行つてごらんさい。まだずんずん変らうとしてゐるから。」

妻「わたしは一度子供たちに亀井戸の太鼓橋を見せてやりたい。」

父「臥龍梅はもうなくなつたらうな？」

僕「ええ、あれはもうとうに。……さあ、これから驚いたと云ふことを十五回だけ書かなければならない。」

妻「驚いた、驚いたと書いてゐれば善いのに。」（笑ふ）

僕「その外に何も書けるもんか。若し何か書けるとすれば、……さうだ。このポケツト本の中にちやんともう誰か書き尽してゐる。——『玉敷の都の中に、棟を並べ葺を争へる、尊き卑しき人の住居は、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。……いにしへ見し人は、二三十人が中に、僅に一人二人なり。朝に死し、夕に生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より来りて、何方へか去る。』……」

母「何だえ、それは？ 『お文様』のやうぢやないか？」

僕「これですか？　これは『方丈記』<sup>はうぢやうき</sup>ですよ。僕などよりもちよつと偉かつた鴨<sup>かも</sup>の長<sup>ち</sup>明<sup>やうめい</sup>と云ふ人の書いた本ですよ。」

(昭和二年五月)

# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集 第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1971（昭和46）年10月5日初版第5刷発行

初出：「東京日日新聞」

1927（昭和2）年5、6月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.jutyama

校正：もりみつじゅんじ

1999年8月23日公開

2012年3月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 本所両国

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>